

を掘ることができないからだ。極寒の中での作業のつらさ。寒いというより体が痛い。

半年も過ぎたところか、所内に風呂場、洗濯場、滅菌所などができたのでシラミや南京虫は駆除できた。これらも皆、我々が作り上げたものだ。だが食料事情は依然として悪く、ひもじい思いを続けた。二年も過ぎるころになると、少量の米や塩漬けの魚類、乾燥トマトなどが支給され、幾らか改善された。しかし十分とは言えなかった。皆瘦せこけ、肋骨の張り出した体になっていた。収容所も転々と移動させられ、いろいろな労働をさせられた。伐採、道路工事、建築などで、時には二頭馬車を御し材木運搬もやった。

このころになると、ソ連側にへつらった一部の先鋭分子により民主運動が開始されるようになった。夕食後早く寝たいと思うのに、彼らの指導で、ソ連の発行する日本新聞等を利用して政治教育を強制された。彼らは、我々に対するソ連側の洗脳教育の一端を担っているのだ。反対すればいわる吊るし上げをくう。また、帰国を遅らされては大変だ。何事も帰るまでとは

我慢を重ねた。このように同胞同士の醜い葛藤が繰り返されたのである。

昭和二十三年九月、苦しかった強制抑留生活から解放される日がついにきた。帰国である。貨物列車で運ばれナホトカに着いた。日本船「山澄丸」が入港していた。皆、喜び勇んで乗船した。三年余の悲惨な苦しみを与えられたシベリアの大地を後に、船は祖国に向かって走った。

昭和二十三年九月二十四日、船は舞鶴に入港した。生きて祖国の土を踏むことができた。そして、生死を共にした戦友たちと西へ東へと別れを惜しみ、懐かしい我が家に向かった。あの苦しさ、そして祖国へ第一歩を記したあの感激は生涯忘れられない。

シベリア抑留の思い出

島根県 佐藤 英男

私は大正十四年六月二十日生まれで、村の小学校を

卒業後、昭和十六年春、日立製作所安来工場へ養成工として入社しました。家族は両親と姉一人、妹四人の家族構成です。

そのころ、日本は支那事変の真っ最中であり、工場は軍需工場で、飛行機の部品を製作しており、午前中は工場、午後は軍事訓練で、軍国時代の象徴的な生活でした。当時は、軍隊に行かないと一人前の男でないとの風潮が強く、現役志願をした人も多かったようです。昭和十九年四月徴兵検査をうけ甲種合格となり、十月には意気揚々と広島市の西部第十部隊へ仮入隊いたしました。

仮入隊して九日目、満州行きとなり、同年十月に、満州国琿春、第二十二師団通信隊へ入隊しました。部隊は古年兵が多く、徹底的にきたえられ、大変きびしい軍隊生活の始まりでした。その後、輜重隊へ派遣され、一期の教育は五カ月間、他の部隊は三カ月もあつたようですが、私たちは長くつらかったことを記憶しております。

昭和二十年四月一期の検閲が終了し、師団本部に帰っ

たころは、古年兵は皆南方へ転属しており、戦局は悪くなる一方で、召集された老兵と初年兵の集団になりました。そのうちに佳木斯に特攻隊が新設されて、その要員に選抜されたが、兵器はなく、毎日毎日、匍匐前進ばかりの訓練には閉口しました。そして運命の八月九日、突然ソ連機が来襲して焼夷弾の投下攻撃が続き、我が方はなす術もなく撤退、南下の途中、綏化駅で終戦を知った。

終戦になると、濱江省ハルビン小学校に集結し、ソ連軍の武装解除をうけた。絶対に日本は勝つと信じていたのに、丸腰になると急に心細くなり、いよいよ日本は負けたのだと実感が湧き、何とも言えないわびしい気持ちになりました。

そして、これからどうなるか不安な毎日でした。一時、非常倉庫内で生活していたが、ソ連兵の服装検査の都度、貴重品などを略奪され、敗戦国民の悲哀を痛く感じたところです。千名単位の作業大隊が編成され、行き先も分からぬまま、行軍することになり、荷物は重くて、満人の大車(ダーチョ)を無理やりに譲りう

け出發しました。

約一カ月、民家付近は避け、野宿しながら前後尾をソ連兵の監視をうけて、夢遊病者のごとく歩きました。大隊長いわく「日本は戦争の賠償を兵隊の労働で行なうことになった」と。とんでもないことだと、一層不安になる。着いたところは、沿海州ダウリチャンカ収容所、大きな炭鉱があり、我々は茫然とし、いつ帰国できるか、お先真っ暗でした。

ここの収容所はドイツ兵がいたようで、木造建ての古くて汚く、人間の住む状態ではなかった。

食事は黒パン、スープで、量も少なく、毎日「お母さん」と呼んで死んで行く者が四、五人おり、全体（二千名）の七〇パーセントが栄養失調だったようです。また、虱が大発生して困ったが、ようやく三カ月くらいしてから入浴、衣類の消毒で退治することができ、多少人間らしくなりました。また、十二月の酷寒期に入ってから、下士官以下五人が逃亡したが直ちに発見され、全員射殺、死体が送還されてきた事件が起き、残念至極でありました。

収容所に入ってから、中隊から選抜され炊事要員として約六カ月勤務し、その後は帰国するまで地下五百メートルの炭坑労働に約一年余り従事したところだ。期間中、落盤事故で一名死亡した以外は大きい事故もなく、換気の状態も良好でした。また、ノルマも普通にやって一二〇パーセント以上になり、給与も質量とも次第に良くなりました。

私たちの収容所は民主教育もあまりきびしいことはなく、無事平穩で過ごしたと思います。昭和二十二年春になるとダモイが実現されるようになり、病弱者を主体としてまず三百名帰国した。その次に私にも待ちに待った帰国命令が出て、四月一日ナホトカに集結して、三日に「明優丸」に乗船することができ、夢のよう、今なお、その嬉しさは忘れることはできません。船上はいたって平穩で、久しぶりを見る日本の看護婦さんの笑顔、日の丸の旗、白米の日本食、日本海を眺める洋上の風景など、今でも心に深く残っております。また、日本本土が近づくにつれ、山々が次第に大きく見え感慨無量、人生最高の気分でした。

四月七日、舞鶴港に到着、DDTを散布してもらい、旧海軍の兵舎に二日間、いろいろの手続で滞在し、三百円頂戴し、故郷に帰ることができました。

我が家は前年火災で全焼しており、掘って建て小屋で生活していたが、家族一同の努力と知人の協力により、二十五年には新築いたしました。その後何事も順調に進み、姉妹五人も市内に嫁ぎ、私も結婚し、二人の男子に恵まれ、家内と共に健康で今日に至っております。

コムソモリスクでの抑留生活

北海道 菊地 常夫

大正六年一月、北海道十勝郡大津村で出生。地元の小学校高等科卒業後、家業の農畜産を手伝い、祖父母、両親、七人兄弟妹の長男で、家計を支え、入隊まで青年学校に進んだ。

昭和十三年三月、関東軍独立守備第二十三大隊第三中隊（満州三江省勃利）に現役入隊、乗馬兵と共に蹄

鉄工となった。同十五年一月、獣医務下士官候補として関東軍軍馬防疫廠で集合教育。同年六月、牡丹江省拉古の第二補充馬廠に出向。同年十二月、転属。馬管理のため翌年三月まで遼陽駐在。同十六年七月、第二野戦補充馬廠本部付。同年八月、獣医務軍曹に昇進。同二十年八月現在、軍馬一千七百頭、自活用の豚百頭、肉牛十頭、鶏二百羽等を飼養し、日本人のほか、韓国人、蒙古人の軍属が管理に当たった。

八月九日、東寧方向からソ連軍侵攻の報で、所属部隊は吉林省敦化に後退するため拉古から貨車で移動、乗馬と輜重車のみで装備で、飼養中の大半の軍馬、自活用家畜は放逐した。

横道河子付近でソ連軍の銃撃を受け、馬一頭を失ったが、身の危険を感じ、日中は森林内に退避しつつ行動した。八月十七日、ソ連軍の侵攻は終息しつらしたが、十九日、馬連河で武装解除の上、強制収容された。収容所では携行した食糧で不自由しなかったが、移動中の悪水でアメーバ赤痢に罹り連続下痢に悩まされ、衰弱甚だしく歩行不能となり、輜重車両上で移動させ